

# 地元学の理念と実際

## ～地域づくりのための方法論～

Concept and Practice of Jimoto-gaku  
A Methodology for Regional Development

鈴木 裕 範  
Suzuki, Hironori

### ABSTRACT

Today, communities in rural areas of Japan are attracting more attention. As a result, studies are being undertaken to enable residents in a local community to review the unique values of their region and take advantage of such values to improve and revitalize the community. I analyze the concept and practice of Jimoto-gaku by showing examples and examining the methodology for revitalizing rural communities.

Jimoto-gaku, as used here, is a survey to establish a method for residents of a rural community to identify traditional values of the area with the help of experts from academia and commerce, and to make use of them to better their own life and revitalize the community. This study is not yet regarded as an “ology”, such as social and natural sciences.

### はじめに

「地域」が注目される今日、地元学や地域学にたいする人々の関心が高まっている。地域に根ざした「学」を、地域づくりやまちづくりに活かす取り組みが増えている。その理由としては、住民みずからが地域のもつ固有の価値である歴史や風土、自然、文化、環境等を地域資源として再評価し、捉え直そうとし

ていることにある。

本稿では、地元学の理念と実際について分析し、地域づくり・まちづくりに活かす方法論を考察する。

## 1. 地元学の発生と発展

### (1) 二つの地元学

「地元のことを知らずに地域づくりも、地域おこしもできない。外の人のほうが自分たちよりも地元を知っている<sup>(1)</sup>」。吉本哲郎は、地元学を始めることになった経緯をこう述べている。熊本県で地元学ネットワークを主宰する吉本は、地元学の提唱者としてしられる。1995年にそれまで（1980年代から）の地域での取り組みを『水俣からの発信 わたしの地元学』にまとめ、地元学の理念と方法を示した。

吉本の地元学は「水」と「環境」を大きな特徴としているが、それは豊かな海と人命を奪い家族や人間関係をも引き裂いた水銀中毒・水俣病を経験した水俣の地に水俣市職員として勤務し暮らすことから出発している。「多くの人が水俣を訪れ、水俣を明らかにしてくれたが、地元の人間が地元を知らないのは恥ずかしい。地元の人間がまず、自分たちが住むところを知らなくては、地域再生や地域は始まらない<sup>(2)</sup>」。吉本の地元学は、命の根源である水、その水を生む森や川に向けられている。太陽・光・天然エネルギー、命の連環が主テーマといえる。

吉本とほぼ同じころ、宮城県でも仙台市在住の民俗研究家で大学講師の結城登美雄による地元学が始まっている。1980年代はバブルの時代である。都市開発が進み、地価が急騰した。地上げ屋による暴力的な追い出しが社会問題化した。都市と地方の格差は拡大し、多くの中山間地域で過疎化が進行した。「村おこし、村おこしって言うけれど、村は起きてこんで」、和歌山県の日高地方の山

(1)『地域から変わる日本 地元学とは何か』(2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会) p191

(2)『地域から変わる日本 地元学とは何か』(2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会) p191

村で当時村人から聞いた言葉である。「地方の時代」は幻想であることがだれの目にも明白になっていた。

地域社会が年を追って変容する時代にあって、東北地方にはまだ伝統的な暮らしや技術が残っていた。しかし、ここにも都市化が押し寄せていた。結城は一人、600にのぼる地区を歩き、地域の人たちの声に耳を傾ける。10年間にわたる足あとでもある地元学は、『この町にこんな暮らしがあった』や『ふるさと七郷』等にまとめられる。それらは「もうひとつの仙台」であり「いくつもの東北」の提示である。忘れ去られる運命の地域は、人びとの記憶と思いによって書き留められた。

地域に住む人間が、みずからの地元を調べる活動は「地元学」以前にもあった。しかしながら、「地元学」の理論化・方法論の具体的提示は、吉本と結城を最初としている。地元学は二人の存在によって「地元学」として知られるところとなった。それは、それぞれの地域における地道な実践の積み重ねとモデル化によるわけであるが、「地域」が様々に語られる時代を背景にメディアが目を向けたこともふれておく必要がある。なかでも『現代農業』（社団法人農山漁村文化協会）の特集、2001年5月増刊号「地域から変わる日本 地元学とは何か」は、地元学を整理・解説した一冊と評価をしたい。また、結城は2005年芸術祭地域活動文部大臣表彰を受賞するが、「地元学創始者」としての活動にたいする功績がある。地元学は“公的”にも認知されたのである。にしても、地元学が水俣市と仙台市という都市でほぼ同時期に展開されたことは、興味深くまた象徴的なのである。

## (2) 地域学と地域検定

「京都・文化観光検定」をはじめ、「奈良ソムリエ検定」「金沢検定」「長崎観光文化検定」等、全国の都市で「地域検定」が実施されている。地域がもつさまざまな魅力を地域外に発信し観光や地域産業の振興に役立てる一方、地元の人には地域を再発見する機会にしようという企画で、地元の商工会議所や観光

協会が開催する例が多い。検定の問題集と受験のためのテキストブックが作成されるのが一般的だ。和歌山県では、田辺商工会議所が2009年世界遺産登録5周年を記念して「熊野地域検定」を計画しており、その公式テキストブックが作成された。これら一連の「地域検定ブーム」には、地元学や地域学への関心の高まりとの関係性をも指摘できる。

地域学は地名に学をつけて、江戸東京学・京都学・大阪学などと言われられる。兵庫県では播磨・但馬・丹波などかつての「国名」の数だけ地域学がある。地域学の地域名は、多くが都道府県や都市、地方名であり、名前だけみれば行政区画を地域の基準にひとつのまとまりとして捉える傾向がみられる。東北学や東海学などのように広域の地域名を掲げた地域学もあるが、東北ではその後会津学や盛岡学、仙台学などが次々に誕生している。東北地方という広い視点をもちつつ、個別の地域により具体的に寄り添うところから地域を捉えていく姿勢が確認できる。

地域学は、地元学と同様に1980年代から90年代にかけて、日本列島の各地に生まれた。地域学の台頭は、従来の地方史や文化財、地理、自然などそれぞれの専門分野だけからでは地域を捉え切れない、もっと総合的、体系的に地域をみて行こうとするものである。地域研究の一つの転換点を示している。少なくとも、地域づくり・まちづくりを進める立場からは、そうした総合的な研究、学際的指導や示唆を期待している。いずれにしろ、地域学の隆盛は地元学同様に、地域の衰退や空洞化にたいする危機感の大きさを示していると受け止められる。1999年に兵庫県姫路市から始まった地域学全国大会では、「地域主権」「グローバル」な視点の地域学研究の重要性を強調している。

ところで、地域学は、都道府県や市町村などの地方自治体、民間団体、大学等高等教育機関<sup>(3)</sup>とさまざまな団体・機関等を主体に推進されている。今日の空前の地域学現象の背景には、和歌山県の「わかやま学」をはじめ都道府県や自治

(3)「地域学・地元学の現状と展望 その分類考察」(廣瀬隆人『季刊東北学第六号』(東北文化研究センター) p73

体の積極的な姿勢があげられる。それらは、たとえば県民大学、市民カレッジ、そのほか各種講座等に確認することができ、主に生涯学習と地域振興を特徴としている。また、大学が中心になって立ち上げられた地域学には東北学や長崎学などがあり、それらのなかには学内外に地域研究の場を提供している事例や大学の授業科目で地域学講座を開設している例がみられる。その共通点は、地域研究を特定の専門分野だけではなく、各分野の研究成果を結集し総合的に捉えていく姿勢がみられることである。

地域学と地元学は、地域について地域に立脚して研究していく点ではほぼ同じと考えられているが、地域の定義の仕方に微妙なちがいがうかがえる。そう考える理由のひとつは、地域の規定の範囲、地域の捉え方にある。つまり、地元学の言う地域はそこに住む住民がいうときの地域であり、地域学に比べて地域の範囲が限定されていると思われるのである。二つ目は、研究の仕方にある。地元学は結城の言う「当事者」つまり地元住民がまず主体となり、地域を掘り起こす。人の「語りや記憶」を重視しながら地域を記録し、「住みやすい地域」を構想、構想から実現へとつなげていく具体的行動＝「つくる」行為が、地元学のほうに強くみられる<sup>(4)</sup>。そして、三つ目が、地元学は連携と共同の学であるという点である。地元学の地域学には、目的は同じでも理念と方法論に差異があると、考えられる。

### (3) 地元学・地域学を生んだ時代背景

地元学や地域学が活発化してきた背景には、前述したように都市と地方を問わず顕在化している地域をめぐる諸問題がある。地域をめぐる危機的な状況が、みずからのアイデンティティと関わって、そうした「学」にたいする関心を一層強めている。

地方においては、地域の経済や人々の暮らしを支えてきた農林水産業の衰退

---

(4)『地域から変わる日本 地元学とは何か』(2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会) p16

を招き、過疎・高齢化が急速に進行している。列島の暮らしの画一化、均質化が進み、地域に根ざした地域らしさを作り上げてきた伝統的な暮らしや技術が衰退し、数え切れないほど消滅してきた。また、グローバル化やIT社会は地域格差を拡大させており、さらに市町村合併による行政の広域化が明治維新以来または昭和の合併以降続いてきた地域社会の構成そのものを変えている。言い換えれば、従来の半世紀以上におよぶ地域が解体され、再編・再構築を求められている。地元学や地域学への期待は、そうした動きに対する方法論としての側面をもつことは間違いないだろう。長野県木曽町ではまちづくりを進める足がかりとして木曽学を始め、木曽学研究所を設立している。木曽町は、2005年11月4町村が合併して誕生した。

地域の問題は、住民みずからが暮らしの場やあり方を考え、主体的な役割を担うところから始まる。地域を生きることの問い直しは、地元学や地域学からの地域再生・まちづくりの取り組みにつながっている。

一方、都道府県や地方自治体と地域学・地元学の関係は、地方分権とそれともなう地域間競争が激化するなかで、行政としても地域らしさ、地域の特性を地域振興のうえでより強く位置づける必要性に迫られていることがあげられる。それは地域ブランドの認定や地域資源の発掘等のまちづくりにたいする行政の支援、関わり方にみられる。地元学と地域学は、その意味で今後一層活発化することが確実である。

## 2. 地元学の理念と方法の分析

### (1) 地元学の理念

地元学について、吉本哲郎は「風に聞け、土に着け『風と土の地元学』」のなかで、つぎのように述べている。

「地元の人が主体になって、地元を客観的に、地域外の人視点や助言を得ながら、地元のことを知り、地域の個性を自覚することを第一歩に、外から押し寄せる変化を受け止め、内から地域の個性に照らし合わせ、自問自答しながら地域

独自の生活（文化）を日常的に創りあげていく知的創造的行為である<sup>(5)</sup>。住民が地域独自の生活文化を伝承し、創造していくことに、地元学の目的をおいている。地元学は、「生活文化創造」の学と言う。

地元学は「個々の現場の具体に寄り添う」、ing の学というのは結城登美雄である<sup>(6)</sup>。結城は「地元学的地域づくりは経済活性化を必ずしも第一義とはみない」。つまり、地元学は暮らしのあり方や地域に生きることを意味を考え「豊かさの質」を追求することを重視する。自分たちが住んでいる地域を見直して、地域のあるものに気づき、自分たちの手でよりよい地域を創りあげていくことを、地元学は基本としている。そのためには地域の構造（構図）を知らなくてはならない。「地元気づきわかりやすい回路を探る手法」が地元学、と吉本は位置付けている<sup>(7)</sup>。

## (2) 地元学の仕組みと実際

地元学は、調査研究を本来としている。調査の主体は、まず地元住民自身である。これに地元以外の地域の住民、あるいは地域外住民や大学の教員等の専門家、学生等が加わる。吉本は地元の人を「土の人」外部の人を「風の人」と名づけ、結城は「当事者」と「当事者に寄り添う人」と述べている。また、吉本は「土と風」の関係の間に「水の人」の存在をおく。「水の人」は二者の出会いから交流、連携へという信頼関係構築の仲介役、つなぐ人と位置付けられる。地元学は、地域内外の人間の連携と共同のもとに行なわれる。

地元学における調査は、聞き取りや資料収集が多く行なわれる。「見る」「聞

(5)『地域から変わる日本 地元学とは何か』（2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会）p195

(6)『地域から変わる日本 地元学とは何か』（2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会）p16

(7)『地域から変わる日本 地元学とは何か』（2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会）p191

(8)『地域から変わる日本 地元学とは何か』（2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会）p208

く」「話す」「知る」「考える」という連続した行為は、「現場」にある。地元学は、地元の人の傍らで地域の現在をみつめ、地域の歴史をさぐる。人の話に耳を傾け、人の記憶を引き出すことが必須である。家ならば家の、森林や田畑ならば森林や田畑の、川ならば川の、人との関わりや積み重ねられた時間の連なりを、地元学は確かめる学びでもある。

調査対象は、地域に係わるあらゆる分野に広がる。地理・地質・気候風土などの自然から歴史（文化財・建築物・文書等）、文化（祭り・伝統芸能・方言）、民俗（衣食住）、産業、食べ物、町並みなどの景観、環境など多岐におよぶ。<sup>(9)</sup> 人があり、モノがあり、コトがある。それら基礎的な調査にもとづき、さらに個別・具体の調査を行なう。それにより「地域の固有性・個性を自覚」し、「地域の文脈を読み解き」<sup>(10)</sup> 地域の将来を構想しつくりあげていく。

地元学は「あるもの探し」であり、「客観的」な見方を大切にする。「当たり前はあたり前ではない」「普通は普通ではない」。先入観や押し付けは排除する、地元学は人の話に耳を傾けることなのである。

さらに、「客観性」を担保するもうひとつの方法が、地域外の人を目を借りるということである。わたしたちは往々にして、自分たちの住む地域とほかの地域との違いに気づかない。聞き手に求められるのは、生活者としての感覚であり、森羅万象にたいする幅広く深い関心である。大学等専門家との連携が必要になる理由でもある。

たとえば、和歌山県南部の熊野地域で端午の節句に食べる柏餅は、地域によって「おさすり」「えべつもち」「いびつもち」等と呼ぶ。しかも、葉は柏の葉ではなく地域住民が「いびつ」や「サンキライ」と呼ぶ「サルトリイバラ」（和名）の円形の丸みを帯びた葉である。葉で餡入りの餅を包み蒸す方法は同じだが、柏の葉のそれにくらべて餅の形は小さい。串本町には祭り等にトビウオを食べ

(9) 「地域学・地元学の現状と展望 その分類考察」(廣瀬隆人『季刊東北学第六号』(東北文化研究センター) p86

(10) 『地域から変わる日本 地元学とは何か』(2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会) p195



る食文化がある、和歌山県ではこの地域だけにトビウオ漁の伝統が残る。それは地域の特性であるが、なぜそうした文化や民俗が形成されたのか、その歴史をたどることが地域の固有性に着目し地域の文脈を読み解く行為に他ならない。当然と受け入れてきた伝統や生活習慣が、千年もの時間を遡り、その源流は中国や東南アジアの国々に求められる文化である可能性を孕んでいるのである。地域を客観的に見、地域外の人の支援や助言を受ける意味がそこにもある。地域の固有性に気づく地元学は、地域を科学的、体系的、学際的に捉えていく試みである。

### (3) 地元学と地域研究

地元では、というとき、わたしたちは地元をどのように規定しているだろうか。都道府県では、範囲が広すぎる。また、たとえば和歌山県の熊野地域や紀北、紀中、紀南地方についても一般的には地元とは呼ばないのではないだろうか。地元という地域は「市町村またはそれよりも小さな単位の地域コミュニティ（町内会・地区）」と捉えられる<sup>(11)</sup>。しかしながら、吉本が指摘するように市町村という行政区域は「記号」であり、市町村合併によって行政区域が拡大し広域圏化するなかでは、異なった歴史文化、習慣をもつ地域（旧市町村）がひとつの地方自治体を構成している。

吉本は地元について「生活圏域」とし、結城は「住民とは人と人の関係に配慮して暮らす人々のことである。その相互関係によって成り立つ場所」が地元とする<sup>(12)</sup>。これらのことから、地元は「一つのまとまりをもっている」地域共同体などのコミュニティであり、日常生活のなかで「風土や歴史、生活領域をひとつにする」同じ生活圏域の地域とみなすことができる。たとえば、明治初頭の廃藩置県によって飛び地となった北山村では、それ以前はもちろん現在に至る

(11) 『地域から変わる日本 地元学とは何か』（2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会）p197

(12) 『地域から変わる日本 地元学とは何か』（2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会）p195

まで北山川対岸の三重県熊野市育生町や紀和町西山と生活交流があり通婚圏を形成してきた。熊野川をはさむ熊野川町日足（現新宮市）と三重県紀和町楊枝も兩岸住民の活発な交流がみられ、川の流域も生活圏を同一とする地元地域と考えることができる。行政区域としての市町村は再編されてひとつの地域となっても、地元としての地域はその長い歴史のなかで形成されてきたもので、住民の意識は急激に変わらないと考えられる。ただ、最近では都市と地方を問わず地域社会のなかであって「人と人の関係」が壊れ、自分たちの暮らしの場である地域が揺らいでいる。共同体意識の貧困化、地域コミュニティの衰退がみられる。後述するが地元学による地域づくりは姿を変えてしまった、あるいは変えつつある地域における人と人をつなぎ直し、地域の再構築をする役割を担う視点をもっている。なぜならば、地元学は、すでに述べてきたように地域のなかから地域を構想する活動だからである。

### 3. 地元学の実際

#### (1) 女性と取り組んだ食の地元学

和歌山県の飛び地の村・東牟婁郡北山村に、60歳代から70歳代の女性たちによる家庭料理レストラン「かからの食の店」が2006年11月開店した。地産地消、スローフードにこだわり、山村の食文化を提供する小さな店である。

レストランの立ち上げに関連して、前年秋から10ヵ月余りをかけて北山村の田畑や森と川が生む食資源とそれにまつわる文化や技術を調べることにした。調べるのはレストランに関わる4人の女性と村役場の職員、大学院生、そして筆者も「風の人」として参加した。調査結果は食の暦にまとめ、またレストランで提供する「北山村らしい」食材や献立づくりに活かそうというのが目的である。

女性たちにとっての地元学は、昔から現在まで自分たちが作り家族とともに食べてきた食事を整理し、その食材と生産の現場、さらには食の環境の変化を見つめ直すことにあった。高菜ずしにサエラずし、シシ鍋など昔から食べてきた

食がある。また、自分たち村民が作っている野菜を数え上げていくと、村で栽培されている野菜や穀物は、50種類近くにのぼることがわかった。しかし、コメを作っている家は数えるほどになり、小麦や大豆もほとんど作らなくなっている。その一方で、近年になって栽培するようになった野菜も目立つ。

野菜の種蒔き、苗の植え付けから収穫時期までを調べた。すると多くの野菜の種蒔きや苗の植え付けが早まり、早生品種の導入でコメの収穫は1ヶ月ほど早まっていることがわかり、女性たちはそのことにあらためて驚き再認識した。奥熊野の山深い村で、一冬に雪が降るのは数えるほどである。地球の温暖化が村の農作物から見えてくる。村の暮らしは、地球環境と繋がっている。

それでも、山菜・野草、木の実は20種類余りもあり、収穫量は減ってきたがキノコは10種類近くも採れる。日本の食糧自給率は40%、しかしながら奥熊野の小さな山村では多くの家庭が無農薬・減農薬で野菜を作り、味噌や豆腐も自分たちで作っている。それをせっせと、都会に住む子や孫に送っているのだあ

4  
 April  
 卯月  
 うづき

**3日 桃の節句**  
 北山村のひな祭りは1ヵ月遅れ。ほとんどの地区で赤、白、ヨモギ3色のひし餅と、ちらしずしを作り女子のすこやかな成長を願う。「雛飾りの家は見なかった」と小松に住む大正世代の女性。

**8日 お釈迦様誕生会**  
 お釈迦様をまつり、甘茶がふるまわれる。見福寺ではいまも行われている。(下尾井)

**野遊び**  
 竹原では戦後までみられた風習。春には弁当などを作り野山や川原に出かけた。

**中 旬 みず書讀(またはみぞせぎ)**  
**下 旬 お大師さんの祭り(旧暦3月21日)**



ひな祭りのちらしずし

手 間

金銭を伴わない田植えなどの助け合いを「節い」といい、日本各地の農村にみられた習慣。熊野地方では同じ意味で「手間」、「手間植え」の言葉が使われる。水書讀もそのひとつ。各家から1人が「手間」に出て、水を溝に流し水田に送る。(竹原、下尾井)



ユリネ、赤カブの酢漬け、ちそ(しそ)の佃煮



北山村の「食の暦」の一部

る。現在は作られなくなったが、醤油やどぶろく等を作る技術を継承する女性たちもいる。山深い小さな村の食と食文化の多様さが、外部のものを発見の現場に導き、双方に地域資源への認識を深めさせる。

祭りや年中行事と結びついた食がある。村内の七色・竹原・大沼・下尾井・小松の5地区で、年中行事や祭りにかかわるハレの日の食べ物を調査した。祭りや行事の消滅・衰退にともない失われた食べ物と習慣は少なくない。しかし、里芋料理のようにいまでも食卓に息づく、先人の知恵が生きる伝承料理がある。そのことに感動する筆者たちに、女性たちがまた驚く、「普通のことなのに」。

森の栃の実を拾い、餅に搗く栃餅の文化が、この村にはいまでも伝承されている。渋を抜き堅い皮をむくには、独特の工夫と技術を必要とする。栃餅は淡いチョコレート色が上品な餅で、この地域では砂糖、黄粉、醤油を好みに応じてつけて食べる習慣がある。贅沢な餅の文化である。栃餅を作る文化は北山村から北山川の流域の奈良県下北山村・上北山村にと伸びており、栃餅文化生活圏を形成している。女性たちにとっては、外部の声が足もとの暮らしにある価値をみつめ直し、外部の者にとっては山村の豊かな知恵の食文化を学ぶ時間となったのである。

調査結果は、食の暦「奥熊野の村の暮らし 365 日～北山村の食ごよみ～」(A2 カラー刷り以下「食ごよみ」)にまとめた。タテ軸に村内で聞き取りをした1月から12月までの村の祭りや年中行事とそれらにまつわる料理や食べ物を載せ、ヨコ軸では野菜の種蒔き、苗の植え付けから収穫時期、山菜・木の実・果樹の収穫時期を紹介している。「食ごよみ」は、村が購入して、レストランや役場・観光施設などにおき、PR資料として活用している。

女性たちがみずから価値を再確認した料理や伝統食は、レストラン「かからの食の店」のメニューにいくつも取り入れられることになる。村内から、「家で食べているもので商売をするなんて」という声が聞こえてきた。しかし、その家庭料理を食べに県内外から訪ねて来る人がいるのである。

## (2) 昔の暮らしの知恵と技術に学ぶ地元学

大学生たちが地元学の手法で地域資源を探す調査を、2008年11月29、30の二日間、北山村で行なった。北山村の自立と活性化に向けた具体的な資料を得るために、東京の研究機関、東京農工大学教員と共同で計画したもので、ゼミナールの学生ら20人が参加した。

調査内容は、じゃばら、筏、水使い・水のゆくえ、光と風と暮らしの関係、山の恵みと山林資源、エネルギーの使い方、自給の整え、感謝と信仰、外とのつながりの9項目である。調査方法は、テーマごとの班を2人ないし3人で編成し、村内を歩いて住民から聞き取りを行ない、聞いた話はカードに書いて撮影した写真とともに地図上にまとめる。ワークショップである。そして、二日間かけて歩いた成果は、最終日の午後には村民を対象にした報告会で紹介した。

じゃばら調査班は、現在のじゃばらの村が一本の原木から始まっているというじゃばらの歴史と物語を再確認するとともに栽培や料理などについて調査したほか、水使い・水のゆくえ班は、水道がなかった時代に生活を整えるためにどのように水を使っていたのか、さらに谷水の引き方や農業水利、水運など水に関する暮らしを多方面から調べた。光と風と暮らし班は、風から暮らしを守る家の建て方、光を利用し作物を作る知恵、光や風についての方言や気象との関係など、自然と人がどのように生きてきたのかを聞いて歩いた。



フィールドワークのあとの資源地図づくり

エネルギーの使い方をテーマに選んだ男子学生は、石垣等にみられる灰釜に着目する。灰釜はごみを燃やために自然石を組んで作った釜で、各家にひとつはあり、木を燃やした灰はこんにゃくづくり等に活用された。しかし、ゴミから発生する有害物質が全国的に問題になった 1980 年代から使用されなくなり、放置されているか撤去されている。また、風呂はいまも薪を使用している家が多く、五右衛門風呂のある家もある。学生はリサイクルの考えが生きている暮らしのあり様や自然エネルギーの利用の仕方に、村の人たちのすぐれた知恵や技術を学んだ。「伝統的な暮らしを話す住民は、みなやさしくあたたかだった」と言い、「こうした村固有の資源を再評価し活用してみてはどうか」と提案した。

道とその歴史について調べた女子学生は、村まで国道が延伸し便利になった反面、来訪者の増加で騒音がもたらされ日帰り観光が多くなったという村民の声に便利さや豊かさとは何かを考えさせられる。国道が通る以前交通不便な道をたどってやって来た葉売りや魚の行商人について語る村民の表情が気になる。そして、道の地名にまつわる人やいくつもの民話の世界に引き込まれる。高齢者の遠い記憶となり、忘れられていく民話・伝説に「これは、村の歴史を語る資源だ」と発表したのである。

地元学は、生活者としての感覚や経験が問われる。歴史や自然、風土、文化、産業や職業、暮らしに関する知識が試される。地元学は“引き出し”が問われる「学」なのである。コミュニケーション「力」も課題である。信頼が話を引き出す、その意味では地元学は「人間学」と呼ぶことができるかもしれない。「おもしろい授業でした」、別の女子学生のフィールドワークを終えた感想である。

### (3) びん玉のまちづくりの地元学

週末の宵闇が迫るころ、仲ノ町と脇入地区（以後、脇仲地区）の町並みをびん玉の灯りが照らす。びん玉の青と黄色のやさしい光が地元住民や観光客の姿を浮かび上がらせる。地元住民で作る「よみがえれ 脇仲倶楽部」（藤原睦展会長）の取り組むびん玉のまちづくりである。



### 夕暮れ時、びん玉に灯がともるとき昭和の時間がよみがえる

仲ノ町は、東牟婁郡那智勝浦町にある商店街である。200メートルほどの道沿いに60軒余りの商店や民家が軒を並べる。観光客でにぎわうバスターミナルや栈橋から山手にほんの少し入っただけの場所にありながら、観光客のにぎわいとは無縁である。十数軒ある商店も午後5時ごろには店を閉め、人通りがめっきり少なくなる。

仲ノ町は昭和30年代ごろまでは「銀座通り」と呼ばれていた。100軒以上の家が建ち並び、約9割は商売に従事していた。役場や公共機関があり、隣接地には遊郭もある繁華な街でもあった。しかし、町の中心が移動すると、JR紀伊勝浦駅前などの商店街に客を奪われ、衰退の道をたどり続けてきた。近年は店をたたむ人が増え空き家が目立つ。景観が荒廃し、人口の減少と高齢化によるコミュニティの弱体化が懸念されている。

その町で、まちづくりに向けた動きが起きるのは2007年2月、那智勝浦町役場職員が呼びかけた仲ノ町を考える集まりがきっかけである。区長や老舗呉服店の店主、米穀店の女性経営者、元マグロ漁船の船主ら数人の住民が集まった。町の将来にたいする不安が語られ、にぎわいのある町への思いを口にする人がいた。どのような町に整え直すのか、自分たちを見つめ直すことになった。

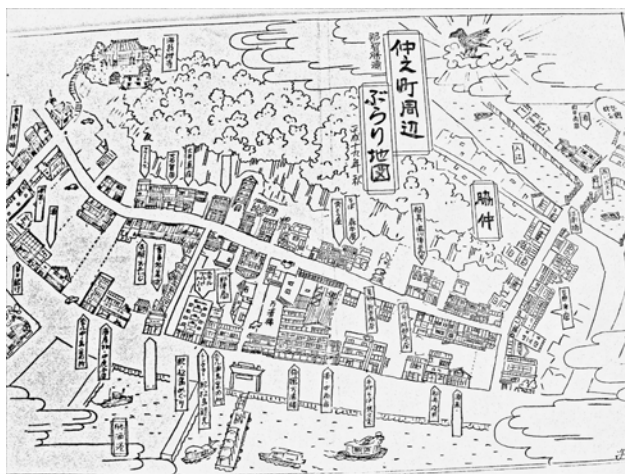
最初に企画した会議には、十数人が集まった。年代は50歳代から80歳代ま



での男女である。そこで行なったのは、「記憶のなかの町・脇仲」をテーマにしたワークショップである。町の今昔、地域に生きてきた人や家について自由に話してもらい、その内容で白い地図を埋めていく。住民が語る物語は大学生がカードに書いていった。

一人が口を開くと、住民たちは堰を切った様に脇仲の昔や移り変わりを語り出したのである。大正から昭和初期、戦前・戦中から敗戦後、高度経済成長から昭和の終わり、そして平成の現在にいたるまで、幾世代ものわが町がそこにあった。住民は隣人の顔やその家のことまで、昨日のこのように話した。記憶のなかの町は、にぎわい、活力と自信に満ちあふれて輝いていた。繁栄を支えた漁業は、サンマ漁の時代だった。それがどうして失われていったのか、ワークショップは衰退の理由と向き合う時間でもあったのである。

翌日、地域住民は学生とともに通りを歩き、建物の前に立ち止まってはその家について語った。学生たちは話に耳を傾けるとともに、店や民家を訪ねては暮らしについて聞いた。仲ノ町には、木造建築の町屋の建物が十数軒残っていた、通り土間や中庭、町屋の暮らしがある。明治時代から営業してきた薬局の店内



まち歩きと住民の証言でマップづくりへ（松本豊氏の試作）



は、「葉の博物館」であった。青果物店は高齢の女性が一人で切り盛りしている。商売の仕方は「量り売り」、高齢者や一人暮らし家庭にやさしい商いがそこにある。看板や広告は、昭和の時代のものであった。学生たちは写真やビデオにおさめた、学生たちの着眼が住民の気づきになった。

住民たちはまちづくりを進めるための組織「よみがえれ 協仲倶楽部」を結成する。そしてはじめに取り組んだのが、古い町屋の残る通りをびん玉で飾ることだった。びん玉は全国の漁業で使われてきたブイに用いるガラス球で、マグロやサンマなど魚種によって大きさが異なる。しかし、現在では耐久性などの面から樹脂性のものに変わり、全国的にもほとんど姿を消している。町中歩きの漁具店で再発見したそのびん玉を「資源」として活用することにしたのである。

倶楽部では近隣の漁業関係者にびん玉の有無と提供を呼びかけたところ、300個以上のいろいろなびん玉が集まった。そのびん玉に穴をあけて光をとます。灯りはろうそくだけではなく発光ダイオードや電池も使う。円球をロープで編み上げる技術をもった元マグロ漁船の船主がいた、漁具店経営者はガラスに穴をあける方法を知っていた。それをやってみようという人が出てきた、地域には専門的な知識やいろいろな技術をもった人がいる。地域の人の存在に、地元の人が気づく。

協仲地区では現在、週末の夕暮れになると30個以上のびん玉に灯が入り、民家や商店の玄関先などを彩る灯りが幻想的な空間を創りだす。2008年の七夕やクリスマスには、そのやさしい灯りのなかでハーモニカ奏者によるコンサートなどが企画された。住民たちは空き家を借りてミニギャラリーや来訪者と住民の交流の場をつくった、名前は「入船館」と名づけた。週末の夕暮れ、仲ノ町の通りには散策する観光客の姿がみられるようになった。経営者が亡くなり店を閉めた古い薬局は所有者の理解を得て「葉の博物館」に利用する計画が進行中である。

記憶のなかの町の物語を探す地元学が、資源としてのびん玉に気づかせた。

それに灯りをともし新たな価値をつくり出したのは住民の発想力である。びん玉の成功が、沈んでいた住民たちに少しずつ自信を取り戻させつつある。「よみがえれ、脇仲倶楽部」には地元住民の約8割が加入している。

#### (4) 市民カレッジの地元学

大阪府岸和田市で2008年に市民が地元学の基本を学ぶ「まち歩き」を企画した。岸和田市教育委員会の市民カレッジを企画・運営する産官学民から成る委員会が「自分の足で見て歩き、地域を見つめ直し、自分たちの力で魅力あるまちづくりを推進するために地元学の実際を学ぶ」目的で行ったもので、大学生をふくめて約60人の市民が参加した。

10月に市民は4つのグループに分かれて、調査をする地域やテーマを話し合い、岸和田郊外の中山間地域である塔原町における農業と民俗芸能、地元財閥ゆかりの邸宅五風荘の歴史、岸和田市の和菓子文化そして紀州街道の歴史と文化の聞き取り調査の4つに決めた。各グループは事前学習をふまえて11月に地域を歩き、調査内容をふまえたワークショップを開催した。さらに、12月には研究発表会も開き、岸和田の町が持つ数多くの魅力や資源を提示した。

和菓子調査の例を紹介すると、市民たちは南海岸和田駅と岸和田城周辺の和菓子店7軒を回り、和菓子店の歴史や客層の特徴や変化、商売哲学やこれからの見通しなどについて経営者から聞き取りを行なった。江戸時代から続く老舗があり、歴史が比較的新しい店でも昭和の初めから80年以上の歴史をもつところがほとんどである。岸和田市は和菓子の村雨で有名であるが、ほとんどの店が自慢の食感や甘さの村雨をもっており、江戸時代の城下町には村雨を中心とした特徴的な和菓子文化が形成されていることを再確認する。しかも、そうした和菓子店がある商店街には洋菓子店が一軒もなかったのである。参加した市民は地元の和菓子をもっと自慢しまちづくりに活かす必要性を指摘し、そのための具体的な方法を提案した。

足もとの地域に目を向けた市民カレッジのこの企画にたいして、受講した多

くの市民が年代を問わずふるさとの魅力を知る気づきの時間と場になったと話し、関係者も例年にない盛り上がりになったという。あるものを探す、五感を研ぎ澄ます学習が新鮮でエキサイティングな時間の共有になったためとみられる。

行政の生涯学習、地域学習事業としてのフィールドワークは、今後全国で増えるのではないだろうか。そのさい、調査は岸和田市のように、まず市民みずからが主体的に企画立案し取り組む場が大事になってくる。

#### 4. 地元学によるまちづくりのために

##### (1) 住民自治の精神と地域評価

地元学は、地域の問題とその課題解決の方法論としての可能性に気づいた人たちによって、全国に広がりつつある。地元学協会事務局長である吉本の「レポート」によれば、岩手県、宮城県から九州の熊本、宮崎、大分県まで多くの市町村におよび、各地域で地域に根ざしたじつに様々な地元学が展開されている。川や環境、神楽・祭り、食文化や海女の文化など、地元学を地域で活かす取り組みは多彩である。

共通するのは、住民が主体になって、連携・共同によってみずから取り組んでいることである。取り組みは、よりよい地域、住みよい地域をつくることを目的としている。地域のことは地域の住民が考えて行動する。地元学は、住民自治の学びである。言い換えれば、より良い地域社会をよりよく生きる、地域を生きる生活者としての思想について学ぶのが、地元学といえる。

地元学は、地域に学び、地域にある資源を再発見し、それらをブラッシュアップして暮らしや地域に活かしていく。地元学は地域評価の手法とシステムとみることにもできる。モノやコト、その資源が持つ「歴史」や「物語」に光を当てる。地元学はつなぎ直し、生活文化を再構築する方法論でもある。

##### (2) 地元学をどのようにまちづくり活かすか

地元学が今日注目を集めるのは、これまで述べてきたようにそれが地域づく

り・まちづくりのすぐれた手法だからである。

地域づくりは、地域に暮らす住民が足もとを的確に把握し、地域の固有性を認識するとともに、可能性や課題を分析し、取り組みの理念と戦略を共有するところから始まる。地域をしるため、「調べる」「気づき」「活用を検討・分析」し、地域に活かす地元学は、学び実践するすぐれた手法といえることができる。地域資源の価値の再評価は、新しい特産品づくりをはじめスモールビジネス、コミュニティビジネスの創出や農家・家庭レストランの開設、グリーンツーリズム等、地域経済や観光の面から期待され実践され始めている。

加えて、地元学が「生活文化運動」として広がっている点が指摘されているが、みずからが住む地元の「物語」の発掘は誇りと自信につながり、その「物語」に磨きをかけることが、地域再生へのあらたな取り組みを生み出す。地域コミュニティの再構築という面からも評価する必要があると思われる<sup>(13)</sup>。地元学は地域にあらたな共同の関係をつくりだす、人間関係をつなぎ直す試みでもあるからである。これが、筆者自身が地元学を地域づくりに活かしたいと考える大きな理由でもある。

地元学の実践にあたって求められるのは、だれが、何のために行なうのか、明確な理念と目的、戦略である。過去に学び、現在を捉え、未来を構想する。自信と意欲を取り戻す、のである。人が動き、人を動かす。地元学は、地域力の学である。

### 引用・参考文献

- ・『地域から変わる日本 地元学とは何か』（2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会）
- ・『地元学をはじめよう』（吉本哲郎著 岩波ジュニア新書）
- ・『季刊東北学第六号』（東北文化研究センター）
- ・『地域学への招待』（京都造形芸術大学編 角川学芸出版）

---

(13) 『地域から変わる日本 地元学とは何か』（2001年現代農業増刊 社団法人農山漁村文化協会） p195